

悩み別

授業アイデア集

「生徒たちが生き生きとする教室を作りたい」「言葉の力をつけさせたい」「それは、わたしたち国語の教師のだけれども、授業時間が少なすぎる」「どんな授業をしたらいかわからない」「仕事が多くて大変だ」などの悩みが付きません。ここに紹介した12の事例は、そんな悩みに少しでもこたえようとしたものです。これらのアイデアを手がかりに、自分なりの授業を展開してみると、生徒たちの新しい表情に出会えることでしょう。

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭 甲斐利恵子

「話す・聞く力」をつけさせたいときの方法

- 事例1 インタビューのモデルを示す
- 事例2 教科書の文章を聞いて〇〇しよう
- 事例3 リハーサルの学習を行う

事例1 インタビューのモデルを示す

「話すこと・聞くこと」の学習をインタビューのように双方向のコミュニケーションとして成立させたいと考えるとき、インタビューを「受ける側」の役割は重要である。たくさん引き出しをもった相手であれば、話も膨らみ、学習が意味あるものになる。

また、学習のためのモデルも必要だ。実際のインタビューの場面の映像などを利用してモデルを示すこともできるが、生徒たちを「自分にもできそうだ」という気持ちにさせるためには、モデルは身近なもののほうがよい。そこで、インタビューのモデルとして、学校の先生方に協力してもらってはどうか。例えば、校長先生のように、それほど親しくはないが、身近な存在という方やユニークな趣味をもっている先生などが適している。学校という場所は、「インタビューの受け手」として優秀な人材には事欠かない。

■どんなふうに

国語科の教師が、身近な先生にインタビューする。その様子を録画または録音して聞かせる。そのモデルをもとに各目のインタビューを計画させる。

■指導のポイント

モデル作成のための準備

教師同士のインタビューであっても、準備が必要である。その先生のどのような面に興味をもち、どのようなことを明らかにしたいのかについてメモを作っておく。生徒にはそれを教師のインタビューの前のメモとして示す。(次ページ資料1インタビューのてびき「①最初のメモ」参照)

モデルの分析

教師のインタビュー場面の再現を通して、
○聞きたいことをどのような順序で組み立てているか。
○一問一答で終わらないために、どのような発問のしかたをしているか。

○相手に気持ちよく話してもらうために、どのような言葉遣い・態度で話しているか。

など、インタビューに必要な条件を分析する。
モデルだからといって、完璧なものでなくてもよい。もっとこういうふうに質問すればよかったと、教師自身が振り返って示せば、インタビューのモデルとして十分意味がある。

計画の段階を共有する

だれに、どんなことを聞くかを具体的に考えて記録する。この計画段階で「だれにインタビューするか」を名票などを利用して一覧にして示すとよい。考えの固まらない生徒の参考にもなるし、同じ人物にインタビューしようと考えている生徒には、質問したいことが重ならないようにアドバイスすることもできる。



資料1 インタビューのてびき



資料2 「物語(随筆)を聞いて登場人物をつかもう」ワークシート

取るのかを常にはっきりさせておくことがポイントである。聞いた後で、記憶力を試すような問いを発するのは、いつまでたっても聞く力はつかないだろう。
短めの作品を読む(CDを利用するのもよい)
同じ学年の作品の中から選んでもいいし、ほかの学年の作品、過去に使われた作品、小学校の作品なども利用しよう。

事例2 教科書の文章を聞いて〇〇しよう

「話すこと・聞くこと」の学習はなんとなく大がかりになるイメージがある。準備の時間も大変そうだし、学習を行えたとしても評価はどうするのかなど、心配の種がいっぱいある。

今回提案する「聞き取り」の学習は、身近な材料を使つて行う、「聞くこと」の力をつけるための小さな学習である。「聞き取り」は、なんのために、どんな力をつけたくて、何を聞き取らせたいのかをはっきりさせておけば、教科書の中の文章が、「聞き取り」のよい材料となる。

① 物語(随筆)を聞いて登場人物をつかもう

この学習は、もちろん「読むこと」の学習とも絡んでくるが、物語(随筆)に出てくる登場人物をとらえるという学習のまとめとしての小テストでもいいし、そのような「読むこと」の学習のスタートに位置づけてもよい。一回聞いただけで目的にあった情報をとらえることは、「聞くこと」の力としても重要である。

■指導のポイント

聞く目的をはっきりさせ、シートを用意する

生徒たちには、なんのために、どのような情報を聞き

② 聞いた情報を分かりやすくまとめよう

説明を聞き、自分なりに情報を整理して理解する力は重要である。教科書の説明文やコラムには、そのような学習を可能にするものが多い。



資料3 文章中の筆者の「問い」と「答え」を聞き取らせてまとめさせた例(2回聞かせた結果)

事例3 リハーサルの学習を行う

「話すこと・聞くこと」の学習でいちばん気をつけたのは、活動の場面を設定しただけで、何を学ぶかを明確にしないまま取り組ませることである。あるいは、練習もさせないで、いきなり本番をやらせることである。

リハーサルの時間を確保することによって、自分の発表を具体的にイメージできるようになり、この学習で何が大切かを自覚することができる。

① みんなで「一斉に発表の練習をしよう」

スピーチの授業をはじめ、時間をきちんと守って発表するのは大切なことである。まずは準備した内容を実際に発表してみる学習を行いたい。

■ 指導のポイント

時間が分かるように

自分の発表しようとしていることがどのくらいの時間を要するのかを体感し、内容を検討したり膨らませたりできるようにする。電光掲示板のようなものがあればいちばんよいが、ないときは、教師が「二十秒」「三十秒」と声をかけてやるとよい。一回終わったら練習をし直して、また時間を計る。このような練習はかなり時間の節約にもなり、内容もブラッシュアップできる。



資料4 リハーサルのワークシート

るのがコツである。

次に示したのは、「わかりやすく伝える」というときのリハーサルで使うシートである。

生徒たちの間を歩きながら様子を観察し、練習や内容の再検討に対して助言する。

② ペアを組んでリハーサルをしよう

一斉に行うのもいいが、実際に聞いてくれる人がいるというのもリハーサルとしては臨場感がある。相手意識を育てたいときや、聞く観点を意識させたいときに有効な学習である。

■ 指導のポイント

アイコンタクトの練習

聞き手を意識する基本としてアイコンタクトがある。生徒は、ついで下を見たり、原稿を読んでしまったりすることが多いが、その練習にもなる。

聞き手の聞くべき観点を明らかにして

聞く人がいるというだけでもペアを組むこの意味はあるが、さらに、こんなことに気をつけて聞くようにと指示することによって聞く学習にもなり、話し手もその観点を意識して話すようになる。もちろん声の大きさや間の取り方など技能面もあるが、ときには内容面や使っている語彙に踏み込んだ聞き方を学習することもあっていい。その場合、聞き手にいくつもの聞く観点を意識させるのは無理があるので、なるべく少ない観点を聞かせ

「書く力」をつけさせたいときの方法

- 事例1 「わたしのあいいうえお」文集
- 事例2 新聞記事をまねて文章を書く
- 事例3 「授業記録」で書くことに慣れる
- 事例4 自主学習

事例1 「わたしのあいいうえお」文集

今回提案する『わたしのあいいうえお 文集』は、「作文」と聞くだけで拒否反応を起こしてしまう「作文アレルギー」生徒向けの「書く」学習である。また、この学習を通して、原稿用紙の使い方、句読点の打ち方、段落の分け方など、作文を書くうえで押さえておくべき基本事項の確認練習もできる。一年生の一学期に適した学習内容といえる。

■ 学習のねらい

- ① 書くことへの抵抗感をなくす
- ② 原稿用紙の使い方、推敲の観点を学ぶ

■授業の実際

作文を書く前に、「あ」で始まる作文のタイトルをいくつか出し合う。「あいさつ」「朝顔」「青空」「雨の降る日」「兄について」など、真っ白な原稿用紙を渡す前に、作文のタイトルを皆で考えることにより、「これなら書ける」という気持ちをもたせる。タイトルを考える際に辞書を活用すると、四字熟語など背伸びした語彙のタイトルも出てくる。

その後、「あ」で始まるタイトルの作文を書き始める。字数は二百字、段落を分けて書くように指示する。二百字にすることにより、①字数が少ないため、比較的抵抗なく書ける、②短時間で書ける、という利点がある。句読点の使い方や段落の分け方についても確認する。この学習の説明と、「あ」の作文を書く作業とで合わせて一時間とする。

次の授業では、教師が推敲した「あ」の作文を清書する。その際、何人かの生徒作品をモデルに推敲の観点を示すと効果的である。作文を書くスピードには差があるので、早く書けた生徒は「い」の作文に入る。「う」以降は、書き方や流れが分かっているので、家庭学習や授業の合間の時間で書くことができる。二、三時間の授業時間でできる手軽さも利点といえる。

事例2 新聞記事を読ませて文章を書く

新聞記事を読んでいると、印象的な書きだしや、効果的に構成されている記事に出会うことがある。ここでの提案は、「記事の内容」だけでなく、「文の型」や「書きだし」を書く学習に生かすことがねらいである。

まねることで「文の型」を学ぶとともに、いつもの自分と違ったスタイルの文章が楽しく書けるといった利点もある。

■学習の実際

東京新聞（2005年8月18日・スポーツ欄）の囲み記事に次のような書きだしで始まる文章があった。

「米メジャーリーグの日本勢で、応援したい選手ナンバーワンを選ぶとすれば、文句なしにこの男だ。カージナルスの外野手、田口壮である。」

この文章をまず読み、「この書き手は、なぜ田口選手をナンバーワンと考えているのか。箇条書きで理由を挙げよう。」という課題を出す。この箇条書きが、自分が文章を書くときのメモのモデルになる。

■授業のコツ

作文を掲示する、印刷して配付するなど、文章を読み合う機会を作ると生徒同士刺激し合うことができる。また、『わたしのあいさつ』文集を作成して文化祭に展示するなど、作品発表の場を設定すると、充実感をもたせることができ、次の書く意欲につながる。



資料5 「あ」の作文例

メモの例

- ・現在、三割三厘の成績。三十六歳にしてチームに欠かせない存在となった。
- ・最初は、実力を証明する場さえもらえなかったが、不満な顔もせず、わずかなチャンスを生かして、3Aからはい上がってきた。
- ・傲慢さが無い。スポーツマンらしいさわやかさが魅力。

「現在」「過去」「人物としての魅力」の三点を柱に文章が書かれていることを確認する。そして、この三点で自分が魅力伝えたい人物のメモを作成する。メモ作成や取材は宿題にしてもよい。

そして、この文章の書きだしをそっくりまねて、友人先生、自分の好きな選手などの魅力を伝える文章を書く。

■学習のコツ

記事がそのまま文章のモデルになる。書きだしだけでなく、この記者の言い回しや語彙もどんどん活用して文章を書くように指導すると、生徒はおもしろがって文章を書き始める。また、ふだん使わない語彙を使って文を書くので、語彙指導もできる。

事例3 「授業記録」で書くことに慣れる

「書く力」をつけるためには、何はともあれ生徒にとつてまず「書く時間」が必要であり、教師にとつては「書いた文章を見る時間」が必要である。しかし、教師は非常に忙しく、週に三時間の授業時数ではなかなか実現するのが難しい。

今回提案する「授業記録」は、習慣として定着させるにはややエネルギーがいるものの、書く材料は決まっているので、題材選びに苦慮することはない。教師は、書かれたものを見るのにそう骨が折れるわけではなく、一方、生徒には記録するという力がつき、書くということに慣れるという点で有効な学習である。

■書く項目

・日時、回数、授業内容、板書の写し、授業記録、感想、メモなど。（指導者の考えで自由に）

■指導のポイント

最初の指導を楽しく、分かりやすく

授業記録だからといって、ただ「書きなさい」というだけでは取りかかれない。日時や回数をどこにどんなふうに記録するかといった基本的なことをはじめとして、

「記録」ということの特質（事実を客観的に書くということ）を教えたり、メモ欄の工夫のおもしろさ、楽しさを伝えるのが重要である。

手引きとなる見本を見て、「こんなふうに記録すればいい」というイメージをもつことができれば、生徒たちはすぐにでも自分なりの授業記録を書くようになる。最初の数回分は授業中に書くように指導し、徐々に自宅などで学習を振り返りながら記録することを指示する。

友達の授業記録から学ぶ

友達がどんなふうに授業記録を書いているかを知ることが楽しいし、そこから学ぶことも多い。よく書けている記録や、工夫が見られる記録を印刷して紹介すると、さらによい授業記録が書けるようになる。

定期的に点検を

初期のころはまめに提出させたい。書かせっ放しにせず、教師が「見る」だけでもよい。ときどき話題にすることが長く続けるコツである。

書くことの評価に

毎回まめに記録すること、学習を振り返って感想や課題を明確にすること、メモをとることなど、「書く力」の評価にもなる。定期的に提出させて評価することが重要である。

資料6 授業記録例

日付	授業回数	授業内容	板書	感想
10月10日	1	漢字検定問題集	四字熟語	
10月11日	2	対義語、文学史	古典冒頭の視写	
10月12日	3	新聞記事の要約	映画の感想文	

事例4 自主学習

学習を始める前に、自主学習にはいろいろなパターンがあることを生徒に示す。漢字検定問題集、四字熟語や対義語、文学史、古典冒頭の視写、読書の記録、自作の詩、新聞記事の要約、映画の感想文などが考えられる。以前の生徒の自主学習の例を見せると身近に感じられるようだ。授業でも、「これは調べてみるとおもしろい。」「ここは覚えたほうがいいから一度まとめてみたほうがいいね。」「などの言葉を言い添えるようにすると、自主学習への導入がスムーズに行える。

今回提案する漢字の自主学習は、「漢字が書けるようになる」ということ以外にも、さまざまな利点がある。例えば、教師は生徒一人一人の力や興味や個性を知ることが出来る。生徒たちは、「国語ってどう勉強していい

か分からない。」という状態から、「とりあえず自主学習もやってみるし、自分は国語はがんばっている。」という学習のエネルギーをもつようになる。自主学習を継続できると、学期末には、国語の授業への関心や参加度が高まったことを感じるようだ。

自主学習の説明に必要な授業時間はごくわずかである。やり方（書き方、内容、提出方法）やどう評価するかの説明をする。提出されたおもしろいものを紹介する。自主学習の提出状況を知らせる。このくらいである。

■用意するもの

・B5の自主学習用紙（縦罫の用紙）

自主学習提出後、一枚につき一スタンプを押すこととする。罫の幅によって字数が変わってくるので、統一した用紙にしたほうが、スタンプの数に不公平が出ない。

・B5の用紙をはさむ画用紙

表紙の部分にスタンプを押すマス目をつける。一枚一スタンプなら、表紙のマス目は五十マスくらいにしておいたほうが、学期中に二枚目にいけるチャンスもあり、喜びも大きい。

■やり方

B5の自主学習用紙（欄外に名前、提出日、通し番号を記入させる）をスタンプ欄のある表紙にはさみ、提出

させる。

提出されたらスタンプを表紙に押し、時間があればひとこと添えて、翌日には返す。（時間が無いときはスタンプを押し、その場で返す。）生徒に紹介したいものを忘れずにチェックするようにする。

■ポイント

どのような形ででも成績には入れる

成績に入れるが、とてつもなくたくさんやる生徒も出るので、一個一点とは言わないほうがいい。

アイデアをほめる。提出したことをほめる。

ときどき新しいタイプの自主学習をプリントしたり、スタンプ・ランキングを発表したりして、盛り上げていくことが大切である。



資料7 自主学習（漢字）の例

■指導のポイント

おおげさに考えない

「さあ、『読書』の授業をするぞ。」と力が入りすぎては長続きしない。決まった時間に、五分とか十分とか、ほんの少し「読書」に関する時間をとるだけでよい。決まった時間があるとそれが当然となり、準備するほうも小さな話題に敏感になる。「今週の本棚」（資料8参照）とネーミングして取り組むのもよい。

■さまざまな「読書」タイム

①ブックトーク

ブックトークといっても、テーマを決めて何冊かまとめてということだけではない。そういうときもあり、一冊の紹介のときもあり、新聞の広告の紹介のときもあり、というようにいろいろな内容が考えられる。週に一度の読書タイムに行い、身の回りにはさまざまな読書情報がたくさんあるということが伝わればよい。本に関する情報なら、なんでも任せなさいぐらいの自信をもちたい。そのためには、教師自身が常に本屋に足を運んだり、インターネットの情報に接していたりすることが必須である。何より、読書の楽しさが体からにじみ出る人でありたい。

②読書マラソン・読書一万ページ

読書をして記録をする。（資料9参照）そのことによって読書の蓄積ができる。記録されたものは「読書」タ

「読む力」をつけさせたいときの方法

- 事例1 週に一度の「読書」タイム
- 事例2 古典を身近にとらえる
―「兼好様にインタビュー」―
- 事例3 読解の練習
―指示語・接続語の学習―

事例1 週に一度の「読書」タイム

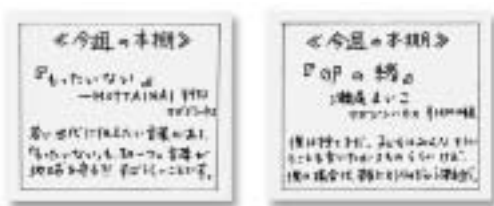
時間数が少なくなっても、「読書」の指導は案外できるものである。もちろん、「読書単元」を実現するのは、ほかの単元との調整などもあり難しいかもしれない。だが、「読書」に親しみ、読書の楽しさを味わう生徒を育てたいという目標であるなら、実践の糸口はいろいろある。

今回提案する「読書」の指導のいくつかは、教師の側の小さな心がけや小さな努力（持続するにはエネルギーや意気込みが大切）で、「読書に親しむ生徒」が少しずつ実現できるものばかりである。

イムの話題になったり、友達との情報交換の内容になったりもする。定期的に集めて点検すると定着するようになる。一万ページを達成した人に達成賞を出すのもいいし、小さなスピーチをしてもらうのもいいかもしれない。

③朗読劇場

「読み聞かせ」と言わず、「朗読劇場」と名付けた。中学生にはびつたりのネーミングではないかと思う。作品の一部を読んでみるのもいい。少しずつ「連続劇場」にして一冊分を読み終えるのもいい。ほんの少しの時間で実現できる「読書」の時間である。



資料8 今週の本棚



資料9 読書一万ページ

事例 2 古典を身近にとらえる

「兼好様にインタビュ―」

古典のすばらしさを感じながら、親しみをもつて楽しく読むことが、古典を「読む」学習の第一歩だと考える。中学生にそう思わせるには、作者を身近な存在と感じ、生きるうえで、何かの価値を見いだせる学習材であること、そして、それを本気で読む活動を仕組む工夫が必要である。

ここでは「徒然草」を取り上げ、「本気で読む」活動例を紹介したい。

■分かりやすいテキストを活用する

兼好の奥行きある人生観から多くの示唆を受けるには、「徒然草」の章段をできるだけ多く読むことである。しかし、授業で読ませるには限りがある。そこで、「上達するには……」「人との交流」をテーマにしている章段から六編ほど選び、口語訳中心に読ませた。

使用したテキストは次の二冊である。

○ビギナーズ・クラシックス 徒然草 角川書店

○使える！『徒然草』 齋藤孝 P H P 新書

この二冊は原文と通訳だけでなく、著者の解釈が興味

③ 口語訳で章段を読ませる。

右の例の場合、「第百十段」を読ませる。

④ 最後に、兼好になりきって答えさせる。

例「フーム。何事も作戦が大事じゃのう。世の中の勝ち組の奴らを見ておると、自分の弱いところがよく見えておるようじゃ。自分たちの弱点をつかんでそこを補強することじゃな。あとは、足の速い奴によいアドバイスをさせて、とにかく負けまいと思わせて、細かいことにも気を配ったほうがいい。勝とうとするとかえって堅くなってしまうっていかんと思うがどうじゃな？」

ほかにも、次のようなインタビュ―例が考えられる。
(一) は関連する章段

○「テニス部に入学したが、いつまでも基本練習ばかり。同時に入学した上手な人は、もう大きな試合に出ているのに、どうして辛いことばかりさせられる。いっそのことやめてしまおうかと思ってるのですが？」
(第八十五段)

○「友達が少なく、退屈でつまらない。どうしたらよいのでしょうか？」
(第十二段) (第七十五段)

この活動によって、自分と兼好の考えを比較しながら読みを深めることができる。そしてなによりも、兼好は自分たちに近いと感じるのではないだろうか。

深く記されていて、楽しく兼好の人物像に迫ることができる。最も有効だったのは、各段の初めに著者の考える「小見出し」が付いていて、内容を理解しやすくしていることである。

例：教材になっている十一段の場合

「蜜柑みかんの木を囲う独占欲―神無月のころ」

(ビギナーズ・クラシックス 徒然草)

「嫌な気分を整理する方法」 (使える！『徒然草』)

このように、小見出しを自分たちで考えさせる学習もおもしろい。

■実践「なりきりインタビュ―」

これは、教科書以外の章段を短時間で読ませたいときに使える方法である。章段の数しだいで一時間でも、何時間でも実践できる。

① 章段の内容に関連した「インタビュ―」内容を提示する。

例「いよいよ運動会が近づいた。今年こそ優勝を目ざしたい！教えてください必勝法を。」

② 自分だったらどうするかを書かせる。

例「とにかく練習しないとします。ちよつとの時間も惜しんで練習すれば優勝できるんじゃないでしょうか。みんなでがんばってください！」

事例 3 読解の練習

― 指示語・接続語の学習 ―

時間数が少なくなっていくちよん感じるのは、読解の時間が十分にとれないということである。入試をはじめとする読解問題には、指示語・接続語などがよく出題されるにもかかわらず、そのような細かいことを教室で学習するのは難しい。

今回提案する指示語や接続語の学習は、いうなれば、家庭学習の一つである。授業時間が削減されて、家庭学習の重要性が増している。テスト前によく、「国語はどんな勉強をしていいかわからない。」という声を聞くが、そのような国語の家庭学習の習慣化にもなる取り組みである。

■教科書の文章の指示語・接続語をチェックしよう

それぞれの単元の始まりでは、この文章でどのような学習活動をし、どんな力をつけようとしているかを生徒に説明すると思うが、そのような単元目標とは関係なく、指示語・接続語には常に気をつけようとして指示しておく。教科書の文章は、すべて読解力をつけるためのいい材料だと伝えておく。

① 指示語の学習

■ 指導のポイント

見本を示して学習のしかたをきちんと伝える

どの学習にもいえることだが、学習を具体的にイメージできるように見本を示すとよい。教科書の文章のどの部分でもできる。「ページ数」「行数」「指示語」「指示語が指しているもの」の四項目を作る。

やらせっぱなしにしない

生徒たちは自分から意欲的に取り組んだものは必ず見てもらいたいのものだ。やり終えた生徒の「指示語が指しているもの」を、全員分正確に見るのは骨が折れるが、最初の一人を見てコピーしておくとか解答にもなる。学習してきた生徒のものを印刷して配布するのも効果的だ。

資料10 指示語の学習ノート例

ページ	指示語	指示語が指しているもの
17	まず	指示語が指しているものは、まずと到着時刻だけを記入することをし、到着時刻に記入する場合は、その時刻を記入すること。
18	また	またと到着時刻だけを記入することをし、到着時刻に記入する場合は、その時刻を記入すること。
19	そして	そしてと到着時刻だけを記入することをし、到着時刻に記入する場合は、その時刻を記入すること。

② 接続語の学習

指示語の学習同様、教科書の接続語を見つけたらチェックする。資料11の例のように、教科書をコピーして接続語を塗りつぶし、書き込む生徒もいるが、最近では赤い下敷きなどを利用する生徒も増えている。赤いラインマーカーで塗って下敷きをかぶせると接続語が消える。「しかし」「そして」「つまり」など、学習を重ねるたびに、前後の文脈を理解するようになり、段落をとらえることも上手になるようだ。

資料11 接続語の学習 マーカー例



「語彙の力」をつけさせたいときの方法

事例1 新出漢字を楽しく学ぶ

— ウソ日記を書く —

事例2 国語辞典に親しむ

事例1 新出漢字を楽しく学ぶ

— ウソ日記を書く —

時間削減の中で、以前のように、漢字をじっくり黒板に書いて、ノートに写させる、という時間がとれなくなってしまう。新出漢字は、ワークブックやプリントを使って家庭で学習するという方法をとっている。けれども、ただ漢字を何回か練習しただけで、漢字を学んだといえるだろうか。生徒たちが、覚えた漢字を実際に使う場面をもっと作ることができないだろうかと考えた。今回提案する「ウソ日記」は、習った漢字の使い方を工夫する力をつけるとともに、漢字を使った文章を楽しんで書くことを目標とした学習である。

■ 内容

漢字プリントの最後に、そのプリントの中で新しく習

った漢字を五つ以上使って、ある日の日記を書く。内容は事実でなくてよい。(次ページ資料12参照)

■ 指導のポイント

読んで楽しいと思える内容に

ウソでもよいが、読み手の気持ち温かくなる内容にするよう、最初に指導する。殺伐とした内容や、だれかが傷つくような内容は不可、と最初に確認する。教室の中が温かいユーモアで包まれるような活動にしたい。

訓読みに注目させて

訓読みがその漢字の「意味」にあたるので、訓読みの使い方をなるべく入れるように指示する。プリントの内容では漢字が熟語として出てくることが多いので、漢語を和語に言い換えることを学ぶヒントにもなる。

ユニークなものを紹介する

楽しんで書くという意欲を喚起するためにも、おもしろい内容のものを印刷したり読んだりして紹介する。語感の違いに気づかせるチャンスとしても有効だ。

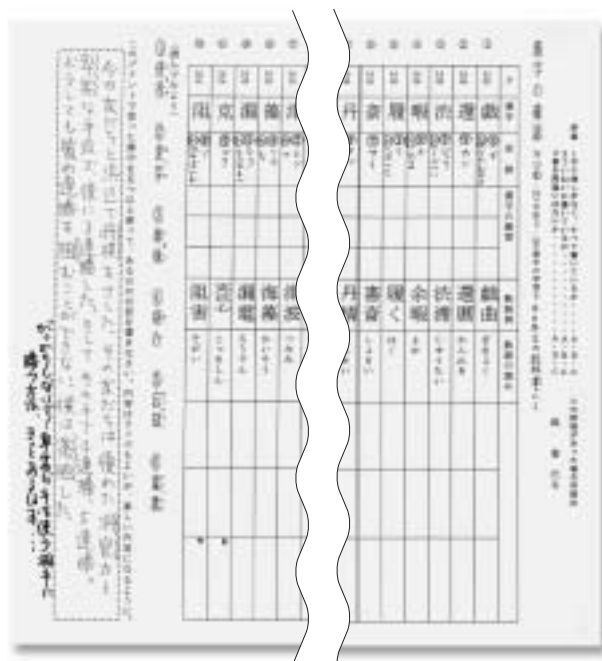
例えば、「霜降り肉を妄想しながらご飯を食べました。」という日記から、「想像」「連想」「回想」などへと語彙を広げていくことができる。

教師のコメント

日記の内容は「ウソ」なのだが、そのウソに調子を合わせて、こちらも小さなコメントを添える。「読ままし

た」という合図程度のものだが、「ウン」の前提があるため気楽な気持ちで書くことができる。架空の日記とはいえ、その生徒の嗜好のようなものが反映されるので、一人一人の興味や関心を知る手がかりにもなる。

資料12 漢字プリント



■指導のポイント 温かな雰囲気

目的の語彙を見つけたらすぐに手を挙げるという指示で、生徒は必死になって辞書を引く。さっと手を挙げたときの教師の声が「十番」だったら「十番」なのだと言っておく。同時に手を挙げた場合は同じ順番になる人もいる。はっきりした順番が分からなくても、だいたいの順番が伝えられればよい。

さまざまな授業で辞書を引く場面を作る

文章を読んでいるときはもちろんのこと、スピーチを聞いた後や文章を書くとき、話し合いのときなど、さまざまな学習の場面で辞書を引く機会を作るように努力させる。自分で気がついて引くようになるまでに数か月かかるので、ときどき「辞書 早引き」と言って引かせると楽しい雰囲気になる。ノートに引いた言葉と順位を記録しておくとうい。もちろん、語釈も書くようになるのが理想だが。

②「発見！国語辞典」

国語辞典に親しませる方法はさまざまあるが、これは国語辞典を細かく見ていくきっかけになり、国語辞典を理解するということが実現できる学習である。

事例2 国語辞典に親しむ

国語の学習をするときに「国語辞典」が手の届くところにならないのは寂しい。いつでもどこでも辞書をすぐ引き、言葉が豊かになっていくそのときどきを実感できる生徒に育ってほしいものである。今回提案する「辞書早引き大会」「発見！国語辞典」は、辞書に親しむための方法である。

①辞書早引き大会

国語の時間の持ち物に「国語辞典」がセットになっているのが理想である。一度も持たせたことがなくてもたいていの図書室には人数分の国語辞典があるので、それを利用するとうい。

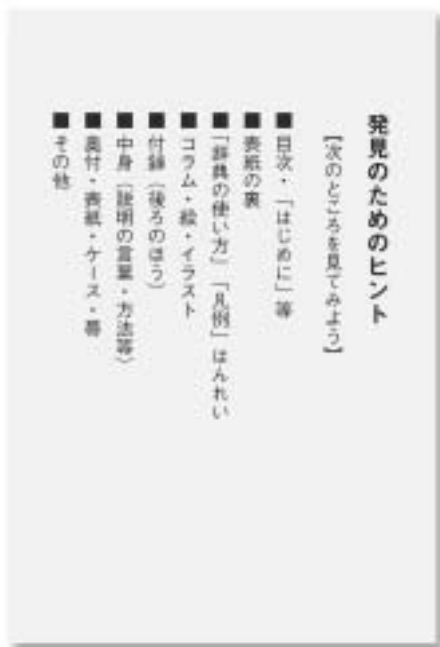
辞書の見出し語がどのような順序で並んでいるかはほとんどの生徒が漠然とではあっても知っているはずである。早く引いて、目当ての語彙を見つけたらさっと手を挙げる。挙げた瞬間に「一番」「二番」と教師が言ってやると自分が何番だったかを知ることになる。これは生徒たちにとって明確な目標があり、意欲的に取り組める学習である。

■指導のポイント

発見の糸口になる手引きを

どんなことが発見の糸口になるかのヒントが何もないでは難しい。発見させたいこと、つまり、国語辞典の凡例を含めた「国語辞典を理解するために」という発見の手引きがほしい。(資料13参照)

資料13 発見のための手引き(一部)



また、それぞれの辞書の違いやおもしろさが分かるように、各自の家から辞書を持ってこさせるほうが豊かな学習になるだろう。国語辞典がぐっと身近なものになる。